様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月　１日現在

機関番号：２５２０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９７１０２１１
研究課題名（和文）　中国東北地区における植民地期以降の社会再編プロセス

研究課題名（英文）　The process of postcolonial social restructuring in Northeast China

研究代表者
坂部　晶子（SAKABE　Shoko）
島根県立大学・総合政策学部・准教授
研究者番号：６０４３３３７２

研究成果の概要（和文）:「満洲国」期以降の中国東北地区における社会再編のプロセスについて、北方少数民族地域を事例としてとりあげ、植民地期の社会秩序が、彼らの「伝統的」生活形態を維持させつつ、近代化の周縁部に置きざりにしてきたのと対照的に、新中国における社会再編によってオロチョンの人びとはその社会発展プロセスのなかに位置づけられていったことを明らかにした。さらに 80 年代以降の社会変化により少数民族が再度周縁化されていく可能性について示唆した。

研究成果の概要（英文）: The research took up the case of northern ethnic minorities and considered the process of social restructuring after “Manchukuo” period in Northeast China. It showed that while the social order of colonial period let them maintain ‘the traditional life style’ and left them in the periphery of modernization, the social restructuring by the foundation of the People’s Republic of China situated the Orochon in the process of social development. Additionally it suggested that there were some possibilities that the social change after the 80s would marginalize them again.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	900,000	0	900,000
２００８年度	700,000	210,000	910,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総　計	3,000,000	630,000	3,630,000

研究分野：複合新領域
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：中国東北、植民地、「満州国」、博物館、少数民族、住民

１．研究開始当初の背景

「満洲国」研究の中心は中国史および日本史であり、そのなかでも松本俊郎による『「満洲国」から新中国へ』(名古屋大学出版会 2000 年）やプラセンジット・ドゥアラによる研究（*Sovereignty and Authenticity : Manchukuo and the East Asian Modern*, Rowman&Littlefield,2003）などのように直接的な加害―被害のレトリックをこえた近代化という枠組みのなかで、植民地現象を理解していこうとする視点が、近年注目されつつある。一方で、歴史学が対象とする期間は、中国解放後数年間に限定されるものが多く、それにたいして、当事者の生活世界を再構成し、そこからその経験の意味や長期的な社会変動プロセスをとらえ返す社会学的視点が重要となってきている。本研究は、これまで日本人開拓民研究に限定されてきたこの領

域での研究に、植民地侵略をうけた中国東北社会そのものの分析を付け加えるものとして企図された。

２．研究の目的

本研究は、日本の帝国主義侵略の現場であった中国東北地区（かつての「満洲国」）を題材とし、かつての被植民地社会の植民地期以降の社会変動プロセスを、現在段階までを含めて描き出すことに主眼をおく。日本と中国双方での「満洲国」という植民地経験にたいする認識の相違には、植民地時代以降のそれぞれの社会の変動と再編のプロセスがかかわっている。植民地を異なる立場で経験したかつての植民地と宗主国社会のあいだの相互理解の架橋を試みるためには、被植民地社会にとっての植民地経験の意味をとらえることが必要である。本研究では、日本の帝国主義侵略の現場であった中国東北社会における植民地期から現在までにいたる社会変動のプロセスについて再構成し、被植民地社会における植民地経験の意味づけのかたちについて新たな視座を提示していくことを試みるものである。

３．研究の方法

本研究では、中国東北社会を題材として、植民地経験のコメモレイションの様式、記憶のあり方について分析してきた、申請者のこれまでの研究実績をふまえて、植民地期の経験の解釈や記憶を規定する社会状況や体制再編について、集中的なフィールド調査に重点をおいて調査・研究を進めた。

中国東北地区をフィールドとして「満洲国」という植民地期以降の社会再編のプロセスを当該地の多様な住民の視点から再構成し、植民地経験と当地の住民のアイデンティティ構成の関連について考察するという本研究の目的にてらし、具体的な調査および研究方法として、以下の三点を実施した。

（１）中国東北地区における植民地期以降現在までの通時的歴史資料の収集。

（２）植民地期に関連する歴史資料館、博物館、記念館等の展示分析。博物館・記念館等の展示は、とりわけ国家や政府の歴史解釈の主導性の強い中国社会において、植民地期の含めた当該地域の集合的記憶の位相を示していると考えられる。対象地域の記念館展示の内容と方法のフィールド調査をとおして、当該地域の公的記憶の位相を確認する。

（３）特定地域における植民地期以降の社会変容にかんするエスノグラフィの作成。中国東北社会における多様な住民の視点として、東北地区の少数民族の生活変遷をとりあげ「満洲国」期とそれ以降の生活との連続・不連続について把握する。フィールドワークによって口述資料を収集し、彼らの生活世界からみた社会変容にかんするエスノグラフィを描き出す。

上述の課題を総合するかたちで、東北地区における住民の多元的視点の抽出と分析を試み、多様な視点からの植民地期以降の社会再編プロセスについて考察を行った。

４．研究成果

本研究では、当事者の生活世界を再構成し、そこからその経験の意味や長期的な社会変動プロセスをとらえ返す社会学的アプローチを主軸にすえ、中国東北地区に居住する人びとが、かつての植民地期を記憶するあり方には、地域や民族、世代によってさまざまなバリエーションが存在すること、またその記憶のあり方に作用した、植民地期以降の社会変動の主要なプロセスについて明らかにした。それは、帝国主義侵略の被害者として自己規定する従来的な中国東北史の枠組みのなかの一面的な住民像ではない、多元的な語り手・主体による歴史記述の可能性について検討するものであった。また、鉄道建設といった交通網の発展や産業開発が代表する「満洲国」の植民地的近代性の分析は、「満洲国」南部地域を中心としてきたが、本研究においては「満洲国」北部地域の辺境地帯に焦点をあて、植民地期および植民地以降の社会再編のプロセスの分析に、周縁部からの視座を付け加えるものとなった。

（１）「北満」（「満洲国」北部地域）における植民地経験の独自性の分析

従来の「満洲国」研究においては、その政治・経済・産業等の中心地域として、大連や瀋陽（奉天）などの南部地域や、国家の首都である長春（新京）などの中央地域が事例対象として重点がおかれてきた。また開拓団研究では、ソ連との国境近辺への植民が多かったこともあり、北満に存在した開拓団についての研究も行われているが、分析の多くは日本人開拓団内部の状況や個々の団員の履歴に限られ、それらの開拓団の流入を受けた現地社会の多様性についてはほとんど取りあげられてこなかった。

本研究では、かつての「満洲国」北部地域にあたる黒竜江省北部および内モンゴル自治区東北部の各地において、当該地域の過去を記念する博物館等の施設をまわり、それぞれの地域における過去の表象のされ方の差異を明らかにした。またこれらの地域は、中国とロシアの国境地帯として、さらに狩猟採集や遊牧等を生業としてきたツングース系、モンゴル系などの少数民族の居住地として、「満洲国」時代の統治・管理のあり方も独自性が見られる点を解明した。

なお、下表は、本研究課題において調査を行った地域とその調査内容についてまとめ

たものである。

		主な調査対象施設	主な調査内容
黒竜江省	哈爾浜市	東北烈士記念館・黒竜江民族博物館・侵華日軍第731細菌部隊罪証陳列館	展示内容調査
	孫呉県	孫呉要塞	遺跡調査
	黒河市	愛琿陳列館・黒河博物館・八一〇微波台	展示内容調査
	黒河市新生郷	嶺上人博物館	展示内容調査 当事者の記憶の聞きとり
	塔河県十八站		当事者の記憶の聞きとり
	遜克県新鄂郷		当事者の記憶の聞きとり
	遜克県新興郷		当事者の記憶の聞きとり
内モンゴル自治区	海拉爾	侵華日軍海拉爾要塞遺址群・呼倫貝爾博物館	展示内容調査
	鄂温克族自治旗南屯	鄂温克博物館	展示内容調査
	鄂温克族自治旗輝蘇木		当事者の記憶の聞きとり
	根河市	敖魯古郷馴鹿文化博物館	展示内容調査 当事者の記憶の聞きとり
	鄂倫春族自治旗阿里河	鄂倫春自治旗博物館	展示内容調査 当事者の記憶の聞きとり
	鄂倫春族自治旗朝陽猟民村		当事者の記憶の聞きとり
	莫力達瓦達斡爾族自治旗	達斡爾民族博物館	展示内容調査

（2）解放以降の社会再編プロセスについての分析

本研究では、中国東北地区における植民地期の社会体制とそれ以降の社会再編のプロセスを通時的に概観するために、黒竜江省および内モンゴル自治区に広がる大小興安嶺の森林地帯で生活する少数民族の一つオロチョン族を事例としてとりあげ、その各地の集住地においてフィールド調査を実施し、そのデータの分析を行った。そこから、以下のような主要な結論を得た。

①日本人による「満洲国」支配の時代には、オロチョンの人びとは山中の密林や湿地帯で馬を乗り回し、正確な射撃で狩猟を行い、カラマツやシラカバを切り出して生活用具をそろえるという、「伝統的」な生活形態をいまだ維持していた。当時オロチョンの人びとは、山中での機動力を期待されていたため、その立脚点ともなる従来の「伝統的」な生活形態が維持される必要性があった。そのため、彼らの「伝統的」生業や居住形態は、外部の植民地支配による秩序に囲い込まれ、産業・資源開発や都市での生活施設にいたるまで近代化を志向した「満洲国」のなかで、そこから排除され続けた周縁部の人びとであった。

②解放期以降の社会再編のプロセスにおいては、共産党による従来の権力者への弾圧、新中国の民族政策の基盤となる区域自治政策の実施、定住村の建設と定住化等の社会変容が重要な転回点となった。こうした変化は、中国社会の発展史観からみれば、原始公有制から社会主義への「直接過渡（直接的移行）」（《鄂倫春族簡史》編写組・《鄂倫春族簡史》修訂本編写組、『鄂倫春族簡史』、民族出版社、2008 年）や、「跨越（越え出ること、飛躍）」（麻慶国「狩猟民族の定住と自立」、『人文学報』第 338 号、2003 年）として積極的に評価されてきた。しかし、こうした社会の変容は、政治的・経済的な体制変革以上に、彼らの生活世界のなかに医療や教育システムといった近代的諸制度を移入するものでもあった。植民地期の社会秩序が、彼らの「伝統的」生活形態を維持させつつ、近代化の周縁部に置きざりにしてきたのと対照的に、新中国における社会再編によってオロチョンの人びとはその社会発展プロセスのなかに位置づけられていったと結論づけられる。

③解放期以降の社会再編は、彼らの生活世界におおむね「近代化」と呼べるような大きな変容をもたらしたといえるが、その過程はけっして平坦なものではなかった。さらに 70 年代以降の北方の森林開発による移入人口の増加、野生生物の保護を目的とした全面的禁猟化、周囲の他の民族との通婚、民族語使用人口の減少といった問題は、オロチョン族

の生活世界に新たな社会問題を生み出している。中国の区域自治政策においては、当該民族の自主的な裁量部分はかなり限定的あり、地域の政策決定は民族主体というより地域主体であるという地域自治政策的性格を考慮に入れれば、「小民族」として現代社会に直接的に接続されたオロチョン族は、再度社会のなかで周縁化されつつあるとも考えられる。

（３）植民地研究にたいする社会学的アプローチの意義

本研究では、中国東北地域においても辺境地帯である黒竜江省北部や内モンゴル自治区における植民地期の記念化の様相を、地域的な差異や民族的な差異を中心にその多様性のなかでとらえかえし、さらに大小興安嶺の森林地帯に居住する少数民族の視点から植民地時代とそれ以降の社会変容を通時的に概観するという社会学的アプローチによる分析作業を行った。こうした作業をとおして、日本の帝国主義侵略にたいする民族的抵抗という公式的語りの規範性が強固な歴史観のなかで、従来一面的にとらえがちであった、植民地経験が中国東北社会にあたえた影響を、多様な住民の視点から再構成していくことが可能となる。それは、帝国の最周縁部であり、また国民国家の最周縁部でもある中国北方地域に暮らす人びとの日常性のなかから、植民地期、ポスト植民地期をみとおす視点を構築するための可能性を追求するものでもあった。本研究の研究成果は、東アジアに独自な人類学的・社会学的研究の一つとして、国際学会でも活発な議論が行われた。

（４）研究成果をふまえた今後の展望

本研究の成果をふまえ、今後も、引き続き中国北方地域において、精力的なフィールドワークを実施すると同時に、中国社会における社会変容のプロセスを、周縁部の人びとの生活世界から描き出すための方法論を精緻化していきたい。

なお、本研究においては、中国北方のいくつかの少数民族の視点をできるかぎりその多元性においてとらえることも視野のうちにおいていた。しかし、これまでの調査・研究のなかで、錯綜した多民族社会の相互の関係性や、80 年代以降の社会の再変容の複雑さをとらえる作業はいまだ途上にあるといえる。これらの課題については、今後の研究活動のなかで取り組むべきこととしたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3 件）

① 坂部晶子、「北方民族オロチョン社会における植民地秩序の崩壊と再編」、『アジア遊学』、査読有（掲載決定）、2011 年 6 月号。

② 宋吉慶・坂部晶子、「戦争体験の継承をめぐって――『良識と正義の呼び声』」、『北東アジア研究』、査読無、第 21 号、2011 年、105-121 頁。

③ 坂部晶子、「中国少数民族の人類学的・社会学的研究についての一考察――主として何群『民族社会学和人類学応用研究』をとおして」、『北東アジア研究』、査読無、第 20 号、2011 年、127-136 頁。

〔学会発表〕（計　4 件）

① 坂部晶子、「非対称的なアイデンティティ（同一性）の狭間を読む――『満洲国』の記憶の重層性を手がかりに」、交錯する北東アジア・アイデンティティの諸相研究会ワークショップ「重層的アイデンティティと地域研究の高度化」、2010 年 3 月 15 日、島根県立大学。

② SAKABE Shoko, Multi-layered Memories of “Manchuria” in a Border Town, The 7th East Asian Sociologist Network Conference, Oct. 2009, Seijo University.

③ 坂部晶子、「講述殖民地經歷的現場――關於記憶的多層性」（「植民地経験の語りの現場――記憶の重層性をめぐって」）、Critical East Asian Studies Forum: International Workshop on Subjectivity of the Other、2009 年 8 月 29 日、台湾・国立暨南国際大学人類学研究所。

④ 坂部晶子、「植民地経験のライフ・ヒストリーにかんして」、日中社会学会冬期研究集会、2008 年 12 月 13 日、神戸市中華会館。

〔図書〕（計　2 件）

① 蘭信三編（著者は編者および坂部晶子他 27 名）、不二出版、『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』、2008 年、全 857 頁中 671-675 頁。

② 坂部晶子、世界思想社、『「満洲」経験の社会学――植民地の記憶のかたち』、2008 年、全 261 頁。

〔その他〕

ホームページ等

① 北東アジア研究』第 20 号
http://hamada.u-shimane.ac.jp/research/organization/near/41kenkyu/kenkyu20.data/20-09_sakabe.pdf

② 北東アジア研究』第 21 号
http://hamada.u-shimane.ac.jp/research/organization/near/41kenkyu/kenkyu21.data/21-07_song_and_sakabe.pdf

６．研究組織

(1) 研究代表者

坂部　晶子（SAKABE　Shoko）
島根県立大学・総合政策学部・准教授
研究者番号：60433372

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：